

公立小学校内における多世代・異文化をベースとした居場所づくりと運営

中 川 真規子

(文教大学教育研究所客員研究員)

Creation and Management of Spaces on a Multi-Generational,
Cross-Cultural Basis in Public Elementary Schools

NAKAGAWA MAKIKO

(Guest Researcher of Institute of Education, Bunkyo University)

1. はじめに

筆者の所属する特定非営利活動法人地球対話ラボ（以下当団体）は、2018年度から気仙沼小学校と協働し、インドネシアの小学校との異文化交流活動を実施してきた。

気仙沼市にはインドネシアからやってきた技能実習生が多く働き、暮らしている。2022年時点で、気仙沼市内に住む外国人市民の約3分の1がインドネシア出身の人々であった。

海外からやってきた外国人市民なしに、地域の基幹産業である漁業や水産加工業等が立ち行かない現実に直面した地域を選んだ道は、外国人市民との「共生」の道を模索することだった。当団体は、そうした地域の人々の想いに共感し、両地域の子もたちやインドネシアからやってきた技能実習生と気仙沼市民との交流活動を始めることとなった。

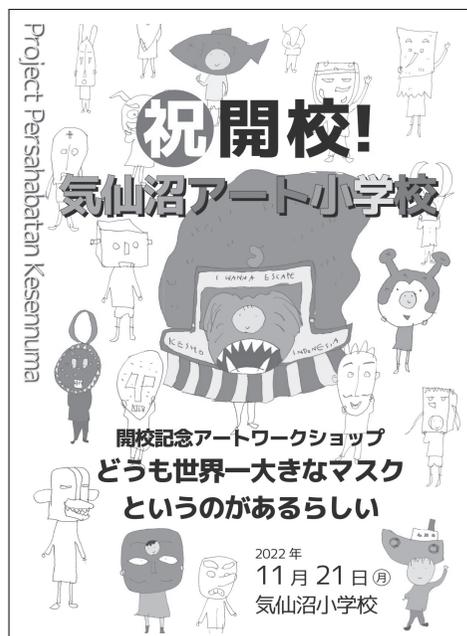
2. 気仙沼アート小学校

交流活動を開始してから5年目の2022年度、気仙沼小学校、現代アーティストと協働し「気仙沼アート小学校（以下アート小）」という取り組みを気仙沼小学校の空き教室（元図工室）を使用し、開始した。

開始にあたり、2022年11月にアート小の開校記念ワークショップを体育館で行った。ワークショップのタイトルは「どうも世界一大きなマスクというのがあるらしい」であった。

気仙沼小学校の交流相手はインドネシア・ポノログにある小学校である。インドネシア・ポノログには現在まで人々の暮らしに脈々と受け継がれる「レポ・ポノログ」という伝統舞踊があり、その踊りで使われる巨大なマスクを作ってみよう、というワークショップであった。

開校記念ワークショップ後、月に3～4日程度、2023年3月までアート小の活動を行った。



資料① アート小開校の際に実施したワークショップに関する配布文書

体育館でのワークショップ後、活動場所を空き教室となっていた図工室へと移動した。アート小は、休み時間や放課後などにやってきた子どもが、自身の「こんなものを作りたい。」「これをやってみたい。」という想いを出発点に、様々な表現活動をするのできる場所である。活動は、誰かと一緒でも、一人でしてもいい。またスタッフと話をしたり、ゆっくりと過ごしたりすることもできる場所であった。

教室内を、作業スペース、お絵描きスペース、音楽スペース、展示スペース（壁面やロッカーなど）の大きく4つに分けた。分けたといっても物理的な壁を設けたわけではなく、それぞれのスペースの境界は曖昧にし、子どもの興味の変化によって活動を変えたり、また活動が混じり合ったりするようにした。

作業スペースは広めにとり、ダンボールで作業をしたり、縦150cm×横3mほどのロール紙に絵を描いたり、「自分への卒業証書を書こう」といったワークショップを実施したり、あえて何も置かなかったりした。その時々でやってきた子どもたちの興味・関心によって臨機応変にスペースを使用した。

気仙沼小では、2022年度もインドネシアの小学校との交流を継続していたので、開校記念ワークショップやアート小をきっかけに、インドネシアとの交流活動に参加する学年の子どもともコミュニケーションを取り、インドネシア交流への子どもの興味や期待、不安に感じていることなども話しながら、準備へとつなげていくこととした。

アート小が子どもの学校生活に馴染み始めると、「もっと長く活動したい。」という声が多数挙がった。そこで、休日の学校開放日に体育館を借り、3時間ほど作業、絵を描いたりできる場として「サタデーアート小学校」を開催するに至った。

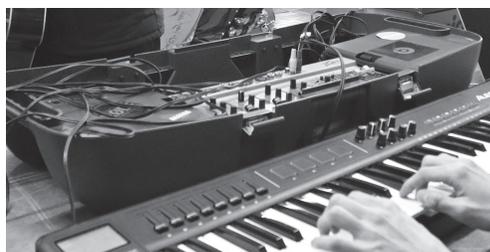
2023年3月、6年生の卒業に合わせて、アート小で制作をした作品を、校内の中庭スペース



写真① 作業スペースに建った秘密基地



写真② お絵描きスペース



写真③ 音楽スペース



写真④ 壁面の展示スペース

スに展示し、子どもや教職員、保護者を対象に展示を行った。



写真⑤ 小学校の中庭で行った展示の様子

3. 小学校内の「もう1つの」小学校

以下では、アート小がどのような場所であるか、またその意義の検討をしていく。

3-1. 「よそ者」と出会う場所

多くの公立小学校内において、学校内にいる大人は、教員、支援員、用務員、給食調理員、ALT（外国語指導助手）、保護者などが考えられるが、その大多数は教員であろう。

そうした中で、アート小を主に運営するのは、NPOメンバー、アーティスト、大学生、若者といった日常的に小学校内にいないであろう大人たちである。年齢も、職業も、居住地も、経験も価値観も多様なメンバーが集まり子どもたちと時間を過ごす。筆者のように毎回その場に関わるメンバーもいれば、時折やってくる大人もおり、運営メンバーの一部はその都度変わる。

基本的に固定的なメンバーで学び生活をする同質的な空間に、「よそ者」であるアート小を運営するスタッフが入ることで、子どもたちは小学校生活ではなかなか出会わないであろう人々と出会うのだ。

最も年齢の近い大学生は子どもたちのロールモデルとなりえるし、アーティストやNPOスタッフという多様な生き方（職業）

を知ることにもなる。

他にも、子どもの言動に対して、子どもたちの「日常」とは異なる反応が返ってくることもある。

こうした出会いや経験は、子どもの中の「当たり前」な考え方や価値観をずらし、相対化を促す側面がある。

当団体は、普段、日本と海外の人々の間に異文化交流の場をつくることで、異文化に興味をもったり、自文化を相対化したりしながら、世界の中に自身を位置づける。その先に地球上の全ての市民が互いに認め合い、尊重し合える社会を目指して活動を行っている。

アート小の取り組みは、国境を越えた交流を扱うものではないが、同じ日本人でも全く違う考え方や価値観で生きる人たちがいるという、広い意味での異文化交流活動でもある。

また、アート小はどの学年の子どももやることができる場所だ。教室1つ分の広さということもあり、絵筆やキャンバスなどの道具や、活動スペースを共有するなど、異学年交流が生まれやすい場所でもあった。子どもの制作の様子を見てみると、「一緒に」活動をしていなくとも、その場を共有している誰かのアイデアの真似をして、自分の制作活動をスタートさせる子どももいた。

3-2. 子どもの声をきく場所

アート小の実施に当たり、「やりたい」「やりたくない」といった子どもの気持ちを活動の出発点に置き、子どもの声をできる限り実現しよう、結果実現できずとも、まずはやってみる、ということをお大切にしたい。

アート小内を工作スペースやお絵描きスペースなど様々な表現活動につながるような空間にしたと先述した。アート小内にあるものを使って子どもが表現活動をするということ自体も目的であると言えるが、制作に関わる絵筆や紙、段ボールといった道具や材料は、子どもの声をきく、コミュニケーションをす

る「ツール」でもある。

したがって、アート小へやって来る子どもの中には、絵を描いたり工作をする手を途中で止めて運営メンバーと雑談をしたり、特に何も制作せずゆったりしたりと、「アート」でない時間も過ごしていった。

「子どもの声をきく」ことを目的に活動を行ったのは、アート小開校時に実施した「どうも世界一おきなマスクというものがあるらしい」ワークショップの時も同様である。

子どもの声をきくことを活動の出発点にしたのは、大人が、子どもが向かいたい到達地点などを共に探す探求者あるいは伴走者となることが、小学校内に「もう1つの」小学校を置く大きな意義だと考えたからだ。

3-3. 対話をする場所

アート小の根幹、それは子どもも大人も、アート小に関わる全ての人たちの間で対話を試みることで活動を創っていくということにある。

アート小に関わるメンバーが、年齢も職業も価値観も多様だということは先述したが、それ故に、何か1つの物事を決定する過程、運営の方法1つをとっても、それぞれの立場や考え方の違いが立ち現れてくることも少なくなかった。

その都度、互いの意見をすり合わせ、合意できる地点を探し、実践をし、また意見をすり合わせ修正する。アート小を実施する度毎回繰り返されたこの対話が、日々変化するアート小を創造し、またこの対話という営みそのものがアート小であると言えるだろう。

対話をする、ということにこだわったのは運営メンバー同士だけではない。「3-2. 子どもの声をきく場所」とも関わるが、それは子どもとのやり取りに関しても同様であった。

自分の気持ちや考えを言葉や文章として言語化するだけでなく、絵を描くことや工作をすること、音楽、遊びを通して子どもの世界

へと足を踏み入れ、対話を試み続けたのである。

また、教職員とも対話を試み続けた。その日の子どもの様子を話したり、アート小に立ち寄る教職員がいた時は、ありのままを見てもらうようにした。アート小の運営に関して、変更したり新たな取り組みを始めたりすることがある場合は必ず学校側と話し合いの場を設けるなどして、互いの意見をすり合わせた。

様々な場所でコミュニケーション教育に携わっている平田オリザは『日本のコミュニケーション教育は、あるいは従来の国語教育の中でも、多くの場合、それは「わかりあう」ことに重点が置かれてきたように思う。私は、その点に強い疑問を持っている。わかりあえないところから出発するコミュニケーションというものを考えてみたい。そして、そのわかりあえない中で、少しでも共有できる部分を見つけたときの喜びについても語ってみたい¹⁾』と述べているが、気仙沼アート小においても、対話を根幹に据える前提はここにある。私とあなたはちがう。お互いにちがうということから、では互いに共有しているものは何なのか、どうやって行動をするのかということに向き合い続けようとした。

4. おわりに

アート小にやって来た子どもたちからは「もっとやってほしい」「ここに居たい」といった声が多数挙がり、子どもにとっての居場所的な空間としての機能も生まれた。一方、運営方法や資金といった活動に関わる課題も多い。「対話」の営みそのものがアート小である、と先述したが、例えば運営側と学校側、子どもと大人、価値観と価値観、様々な関係間やトピックについてよりよい実践をするために対話を深めていきたいと考える。

わずか4か月間ではあったがアート小の取り組みから、「対話」、「協働」の可能性が強まったと考える。

「対話」に関しては、「3-3. 対話をする

場所」でも紹介をしたが、アート小を運営するに当たって、アート、教育、メディアなど異分野での活動経験や異世代の運営メンバー間、メンバーと子どもの間、子どもと子どもの間、メンバーと学校との間等、多方向・多発的に「アート小をどのように運営していくか」を中心とした対話が繰り返された。

戦争、貧困、人権侵害、環境破壊等の課題が山積する社会で、相手を知り、尊重し合うことの重要性と、「対話」を通して人類の生きる社会を創り上げようとする動きが世界中の至る所で試みられているし、多くの人がその重要性を認識していることだろう。

「対話」という営みを、個人が認識できる「小さな」範囲で、試み続ける場としてアート小は存在する。「対話」の「練習」をする（「練習」の先にゴールがあるわけではないが）場所である。

そうして試み続けられる「小さな」範囲での「対話」の土台の上に、子どもだけでなく、教職員との「対話」、そして「よそ者」であるNPOと学校との「協働」をさらに模索し続けたい。

【引用文献】

- 1) 平田オリザ『わかりあえないことから
コミュニケーション能力とは何か』講談社、2012、p5

【参考文献】

- ・居場所カフェ立ち上げプロジェクト編著『学校に居場所カフェをつくろう！生きづらさを抱える高校生への寄り添い型支援』明石書店、2019
- ・柳下換／高橋寛人編著『居場所づくりにいま必要なこと 子ども・若者の生きづらさに寄りそう』明石書店、2019
- ・苦野一徳『学問としての教育学』日本評論社、2022
- ・阿比留久美『子どものための居場所論』か

もがわ出版、2022

- ・宇都宮大学国際学部編『多文化共生をどう捉えるか』下野新聞社、2018

